第31回
読書感想文コンクール

作品集 2017

利尻富士町立鬼脇公民館

第三十一回　読書感想文コンクール作品集の発刊にあたって

利尻富士町教育委員会
教育長　石川武弘

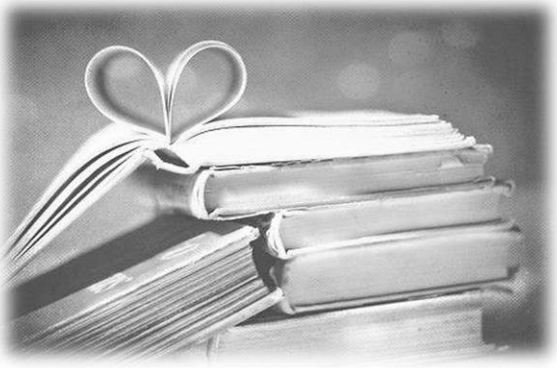
この「読書感想文コンクール作品集」は、今年で三十一回目の発刊となりました。本年度のコンクールには、小学生百〇九編、中学生六十七編、合計百七十六編の応募をいただき、その中から優秀作などに輝いた作品三十三編を一冊にまとめ編集いたしました。

応募いただいた多くの作品には、それぞれ一冊の本を深く読んで感じたこと・思ったこと・連想したことを自分の言葉で力強く素直に表現しており、内容的にも優劣がつけがたく、選考に当たられた審査員の先生方も、とてもご苦労されたことと思います。

近年、スマホやネットの普及により情報が簡単に入手できる時代になり、子どもたちの読書離れは加速しているものと考えられます。このため、本町では今年度から三十三年度まであらたに策定した「利尻富士町子ども読書プラン」により、子どもたちが読書に親しむ機会を得られるよう図書の充実や家庭・地域・関係団体の啓発活動を推進しています。その一環として、各学校においては、朝読書の時間帯にボランティアサークル「りっぷの森」による読み聞かせを行ない、子どもたちがより一層本に親しみ、読書の楽しさや素晴らしさを体験し、読書の習慣化を図ることに努めているところです。

一冊の本との出会いが、子どもたちの夢や希望を育み、想像力を豊かなものにし、健やかに育つための一助として、自ら学び自ら考える力を育むことができる読書環境づくりが大切であります。今後もコンクールを通じて、より多くの子どもたちが読書好きになるよう、事業内容の充実を図るとともに、この作品集が、より多くのみなさまに読んでいただけることを願っています。

おわりに、時節柄公務ご多忙のなか審査に当たられた先生方をはじめ関係各位に心から感謝申し上げますとともに、今後とも多くの子どもたちの個性、可能性を引き出すため、読書活動の推進にご尽力いただきますようお願い申し上げ、発刊のことばといたします。



【作品集　目次】

小学校一学年の部

☆　優秀作

「ぼくのさんりんしゃ」
利尻小学校　一年　こなか　ふうた　・・・６

★　佳　作

「すばこ」をよんで
鴛泊小学校　一年　さとう　しゅうすけ・・・６

「11ぴきのねこ」
利尻小学校　一年　かがや　みお　・・・７

★　奨励賞

「いつまでもともだち」
鴛泊小学校　一年　あまない　ひかる　・・・７

小学校二学年の部

☆　優秀作

「ともだちや」を読んで
鴛泊小学校　二年　天内（あまない）　颯斗（はやと）　・・・８

★　佳　作

「ますだくんのランドセル」
鴛泊小学校　二年　黒川（くろかわ）　歩夢（あゆむ）　・・・９

「おやおや、おやさい」
利尻小学校　二年　佐々木（ささき）　日馬（はるま）・・・９

★　奨励賞

「ママがおばけになっちゃった」を読んで
鴛泊小学校　二年　渡邊（わたなべ）　彩奈（あやな）　・・・１０

小学校三学年の部

☆ 優秀作

「ココ・シャネル」　利尻小学校　三年　中田（なかた）　理央奈（りおな）・・・11

★ 佳作

「想ぞうは楽しいよ」　鴛泊小学校　三年　種谷（たねや）　海璃（みり）・・・12

「しっぱいにかんぱい！」　鴛泊小学校　三年　入井（いりい）　綾花（あやか）・・・13

★ 奨励賞

「ハチと上野先生」　鴛泊小学校　三年　上野（うえの）　日向汰（ひなた）・・・14

小学校四学年の部

☆ 優秀作

「びんぼうとまずしいのちがい」　鴛泊小学校　四年　近江（おうみ）　優翔（ゆうと）・・・15

★ 佳作

「かあちゃん取扱説明書」を読んで　鴛泊小学校　四年　渡邊（わたなべ）　拓斗（たくと）・・・16

★ 奨励賞

「ココロ屋」を読んで　利尻小学校　四年　荒澤（あらさわ）　光惺（こうせい）・・・16

「南極のタロとジロ」を読んで　鴛泊小学校　四年　渡辺（わたなべ）　善太朗（ぜんたろう）・・・17

小学校五学年の部

☆ 優秀作

「武器より一冊の本をください」
鷲沼小学校 五年 杉本（すぎもと） 天音（そらね） ・・・ 18

★ 佳作

「いつも、心の中に」を読んで
利尻小学校 五年 熊谷（くまがい） 爽汰（そうた） ・・・ 19

「森に学校ができた」
利尻小学校 五年 冨岡（とみおか） 小華（こはる） ・・・ 20

小学校六学年の部

☆ 優秀作

「サラとソロモン」を読んで
鷲沼小学校 六年 髙橋（たかはし） 暖（のん） ・・・ 21

★ 佳作

「一歩引いて考える」
利尻小学校 六年 村井（むらい） 言寧（ことね） ・・・ 22

「走る少女」を読んで
利尻小学校 六年 牧野（まきの） 海結（みゆ） ・・・ 22

★ 奨励賞

「妖怪アパートの幽雅な日常」を読んで
鷲沼小学校 六年 寺田（てらだ） ひよの・・・ 23

中学校の部

☆ 優秀作

「島はぼくらと」を読んで
鬼脇中学校 三年 寺島（てらしま） 凪咲（なぎさ） ・・・ 24

「人のためにできること」
鷲泊中学校 二年 山本（やまもと） 彩心（あやみ） ・・・ 25

★ 佳作

「暗黒女子」を読んで
鬼脇中学校 三年 門脇（かどわき） あかね ・・・ 26

「海の見える理髪店」
鬼脇中学校 一年 箕輪（みのわ） 萌華（もえか） ・・・ 27

「最強の兄弟」
鷲泊中学校 三年 関（せき） 透子（とうこ） ・・・ 28

「君の膵臓をたべたい」を読んで
鷲泊中学校 二年 山上（やまかみ） 紗英（さえ） ・・・ 29

「世界でいちばん貧しい大統領からきみへ」を読んで
鷲泊中学校 一年 杉本（すぎもと） 天河（てんが） ・・・ 30

★ 奨励賞

「君の膵臓をたべたい」
鬼脇中学校 二年 七戸（しちのへ） 岳（がく） ・・・ 31

『ビリギャル』を読んで
鬼脇中学校 一年 熊谷（くまがい） 宙大（ひろと） ・・・ 32

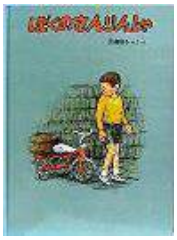
「戦争がなかったら」を読んで
鷲泊中学校 一年 髙橋（たかはし） 優羽（ゆう） ・・・ 33

小学校一学年の部

☆ 優秀作

「ぼくのさんりんしゃ」

りしり小学校　一年　こなか　ふうた



ぼくは、せんせいにすすめられてこの本をよみました。五かいよみました。

このほんは、さんりんしゃをすててきなさいと、おかあさんにいわれたけど、ひろしはすてることができなかったおはなしです。

ごみしゅうしゅうしゃがきたとき、ひろしはさんりんしゃをごみおきばのそとにだして、

「これはぼくのさんりんしゃだ。もうすてたりなんかしないぞ。」

といいました。ぼくでも、さんりんしゃはぜったいにあげません。まいにちのっていたさんりんしゃだからです。

ぼくはこれからも、つかわなくなったものでもたいせつにしていきたいです。

＊こうひょう＊

一年生らしく、素直な気持ちをそのまま言葉で表しているところが良かったです。三輪車を大切に思う主人公の気持ちもしっかり考えることができましたね。

★ 佳作

「すばこ」をよんで

おしどまり小学校　一年　さとう　しゅうすけ

ぼくは、なつやすみに「すばこ」をよみました。このほんのひょうしには、たくさんの木とすばこのえがかかれていて、おもしろそうだったからです。

すばこはむかし、とりをつかまえるためのわなでした。すばこがとりのいえになったのは、いまから百ねんほどまえのことです。そのころドイツに、ベルレプシュだんしゃくというひとがいました。だんしゃくはとりがすきなので、いっぱいくるようにすばこをつくりました。ところがあるとき、ハマキムシがだいはっせいし、ふきんのもりはほとんどがかれてしまいました。けれども、だんしゃくのもりはぶじでした。とりたちがむしをたべ、もりをまもってくれたのです。それから、せかいじゅうですばこがつくられるようになりました。

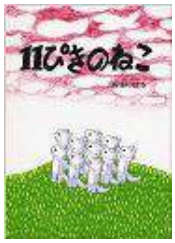
ぼくはこのほんをよんで、いろいろなとりやどうぶつのすばこをしりました。とくにペンギンのすばこはおどろきました。でもすばこは、にんげんが木をきると、どんどんなくなってしまいます。とりやどうぶつのために、もりをだいじにしようとおもいました。

＊こうひょう＊
本を読んで感じたことや驚きが素直な言葉で書かれています。作者が伝えたいことを自分なりに感じとり表現できているところも良かったです。これからも、たくさん本を読んで、世界を広げてくださいね。

★佳作

「11ぴきのねこ」

りしり小学校　一年　かがや　みお



わたしは、ねこがすきです。だからこのほんをえらびました。

このほんは、おなかがすいている11ぴきのねこが、かいぶつみたいなおおきなさかなを、つかまえにいったおはなしです。

わたしが、こころにのこったのは、ねこのちいさいからだでもみんなでちからをあわせて、おおきなさかなをつかまえたことです。のらねこのたいしょうが、おおきなさかなのほらがいのまくらをけとばして、さかなのめがまわったので、わたしはニヤッとわらってしまいました。

もしもわたしが11ぴきのねこだったら、つかまえたおおきなさかなを、みんなにたべさせたいです。じぶんがたべたくてもがまんします。

なぜなら、みんなで、ちからをあわせてひとつのことをやりきることがたいせつだとおもうからです。

＊こうひょう＊
書きたいことが、しっかり伝わってくる感想文です。一年生ですが、自分の考えや感じたことが良く書けています。

★奨励賞

「いつまでもともだち」

おしどまり小学校　一年　あまない　ひかる

この本は、すいかさんのときに、オペレッタをしたことのあるおはなしです。

さるのチョッピーは、ともだちが、キラキラステージのれんしゅうをしているのをじゃまします。

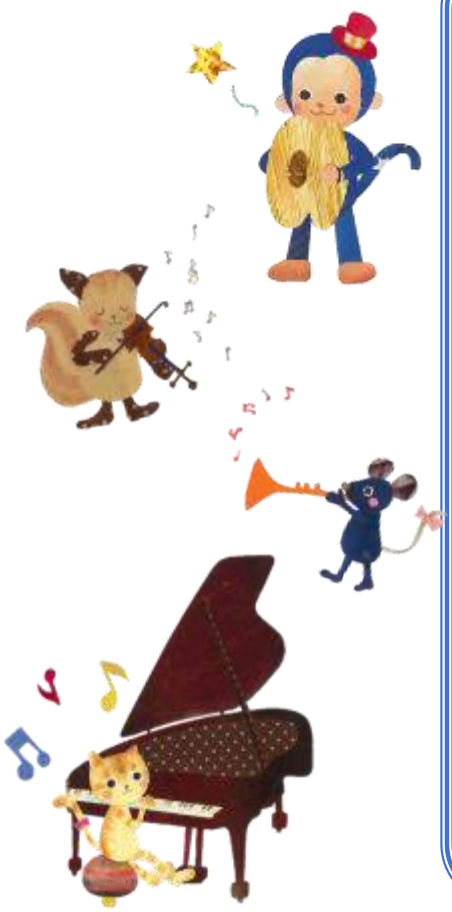
ぼくは、チョッピーは、いじわるだとおもいました。じゃまをすると、ともだちがいなくなります。

でも、チョッピーは、いじわるではありませんでした。ステージのあとにひっこしてしまうから、ステージをやらなくなってひっこしもなくなるとおもったからです。ぼくは、チョッピーは、さみしかったとおもいます。みんなといっしょにいたかったとおもいます。

すいかさんのとき、ともだちがひっこしておわかれしました。かなしかったけれど、もりのなかまがチョッピーにいっていたみたいに、とおくにはなれていっても、ずっといつまでもともだちとおもいました。このことばがだいすきです。

＊こうひょう＊

本が伝えたいことをしっかりととらえ、自分の経験と合わせて書けています。感想を素直な言葉で書けており、読書の喜びを感じられる感想文でした。これからもたくさんの本と出会ってください。



小学校二学年の部

☆ 優秀作

「ともだちや」を読んで

鴛泊小学校　二年　天内　颯斗

この本をえらんだりゆうは、ぼくの一ばん大すきな本だったからです。

ぼくの心にのこった場面は、キツネが「えー、友だちやです。友だちはいりませんか。さびしい人は、いませんか。友だち一時間百円。友だち二時間二百円。」と言っていた場面です。キツネがお金をもらって友だちになっているのがふしぎでした。どうしてなんだろうと思いました。正直に気もちを言えなくてむりをしたりかなしそうでした。

ぼくには友だちがたくさんいます。まい日とてもたのしいです。もし友だちがいなかったらと考えるとかなしい気もちになります。キツネはさびしくて友だちやになったんだと思いました。

さいごには、オオカミとキツネは本とうの友だちになって、オオカミが一ばん大じにしていたミニカーをプレゼントしました。この場面を何回見てもうれしくなります。

ぼくは、この本を読んで、かなしそうにしている友だちがいたら声をかけてあげたいと思います。オオカミとキツネのようにいつまでも友だちを大切にしていきたいです。

＊こうひょう＊
作品で描いていることを素直にとらえ、自分の考えを分かりやすく言葉で表現できています。また、読書の喜びが感じられる文章で、読む人が共感できる感想文だったところもよかったです。

★　佳作

「ますだくんのランドセル」

鴛泊小学校　二年　黒川　歩夢

ぼくが、この本を読んで、心にのこったことは男の子なのに赤いランドセルで、小学校にいくところです。ぼくだったら黒いランドセルをえらぶと思います。

でもぼくはますだくんが好きです。どうしてかと言うと、自分のいけんをしっかりもっているところです。あとにてるところは、早く一年生になりたかったことです。

この本の兄弟は、五人です。ますだくんには、お兄ちゃんも妹もいます。おせわをしたり、たまには、ケンカをしたりしています。ぼくも、兄弟がいます。兄が二人います。べんきょうを教えてもらったり、あそんでもらったりしています。大ゲンカもたくさんします。

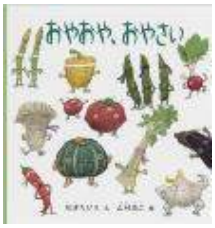
ぼくはこの本を読んで自分のいけんをしっかりもつことと、兄弟が、なかよくすることが大切だと思いました。

＊こうひょう＊
登場人物と自分を比べ、自分の言葉で表現できています。また、作品の伝えたいこともちゃんととらえられています。ケンカすることもあると思いますが、ますだくんのようにいつまでも兄弟、仲よしでいてくださいね。

★　佳作

「おやおや、おやさい」

利尻小学校　二年　佐々木　日馬



ぼくがこの本をえらんだわけは、だいめいがおもしろそうだったからです。

この本のないようは、いろんなやさいたちがマラソン大会に出場してマラソンをします。

一ばんおもしろかったところは、文がダジャレみたいなところです。

二ばんめに、おもしろかったところは、走っているやさいたちにいろんなやさいが、でてきて、ふつうはそんなにない、ハプニングがおきたことです。

三ばんめに、おもしろかったところは、とうがらしのとうさんのかおです。なぜかというと、口がなみみたいだったからです。

四ばんめはすごかったところです。それは、兄弟で大会に出場したやさいのことです。弟がころんだのを兄が見つけてたすけてあげるところです。

さいごに、ころんでも、さいごまで走りきるのがすごいなと思いました。

＊こうひょう＊

順序を表す言葉を使い、分かりやすく書かれていますね。字もきれいで、丁寧に取り組んだことが伝わります。佐々木君なら、他にどんな野菜を出場させたいですか？ 想像するとわくわくしますね。

★ 奨励賞

「ママがおばけになっちゃった」を読んで

鴛泊小学校　二年　渡邊　彩奈

わたしがこの本を読んで気になった人は、四さいのかんたろうのことです。

さみしがりやであまえんぼうなところがじ分とよくにているからです。

なぜ、ママがおばけになったかというと、車にぶつかってしんでしまったからです。

一ばん心にのこった場めんは、ママがいなくてないているかんたろうにママがあいに来て、すがたは見えないけど「ママはここだよ。」とおしらせしているところです。

よるの十二時になるとかんたろうにママのすがたが見えるようになりました。外にママとさんぽに行きました。

さみしい気もちとママにすきとつたえました。

そして、「さよならしちゃダメ…」かなしい気もちになりました。せっかくあえたのに、ママとおわかれするのは四さいのかんたろうがかわいそうでした。

この本を読んで、ママとおわかれしたあとに何でもじ分の力でやってみようというかんたろうの気もちがとてもたいせつだと思いました。

わたしは、元気なお母さんがいるけど何でもたよりっぱなしでした。

すこしでもじ分の力でできることがふえるようにがんばろうと

思います。

＊こうひょう＊

主人公のかんたろうの気持ちを想像し、自分の言葉で素直に表現できましたね。「何でも自分でやってみる」のは、時に失敗もあるかもしれませんが、感想文の最後にも書いた彩奈さんの気持ちを大切にこれからも頑張って下さい。

小学校三学年の部

☆　優秀作

「ココ・シャネル」

利尻小学校　三年　中田　理央奈

わたしは、ココ・シャネルという本を読みました。この本をえらんだわけは、おなじゆめをもったあこがれの人のことがかかれた本だからです。

ココ・シャネルは、フランス生まれの、世界でも有名なデザイナーの一人です。まずしい家に生まれ、おかあさんがなくなって十二才の時こじいんにあずけられ、さみしい思いをしながらも、自分のゆめをかなえ、世界でかつやくしました。

ココ・シャネルがデザイナーをめざしたきっかけは、こじいんにあずけられた時に、スカートのすそをすきなように短くしたら、先生にしかられて、「わたしは、自分の着たいふくを着て自分の力で生きていく」と心にきめたことです。そのあと十八才でこじいんを出たあと、自分のゆめをかなえていきました。

それまでだれもおもいつかなかったようなオシャレなかるいぼうしや動きやすいふくをたくさんつくり出し、すごいなあと思ったのがとくに心にのこりました。わたしもシャネルのように自分のすきなふくをつくりたいと思いました。

ココ・シャネルは、こじいんにいてさみしい思いをしたときも、せんそう中で店をつづけるのがたいへんなときも、自分のすきなふくを作り続けました。自分のゆめをかなえるためにどんなにた

いへんな時でも、あきらめずにがんばることがたいせつだと思いました。

わたしには、四つのゆめがあります。一つめは、デザイナーです。ココ・シャネルと同じように、動きやすくオシャレなふくを作りたいです。

二つめは、ネイリストです。けっこん式やデートする人たちのために、いろとりどりにして、よりかわいくしてあげたいです。

三つめは、ピアニストです。ピアノが大好きで、今でも習っています。

四つめは空手の大会で金メダルを取ることです。空手で強くなっていって、人のためにかつやくして、人助けをしたいです。

たくさんのゆめをかなえるために、どんなにたいへんな時でもあきらめないでがんばります。

【講評（こうひょう）】

ココ・シャネルの生き方に感動し、自分の夢にも希望を抱いたことが上手く表現（ひょうげん）されています。中田さんは、夢がたくさんあって良いですね。読書は自分じゃない誰かになって夢を叶えることもできる素晴らしいものなので、これからもたくさん本を読んで下さいね。

★ 佳作

「想ぞうは楽しいよ」

鴛泊小学校　三年　種谷（たねや）　海璃（みり）

私は、『先生、しゅくだいわすれました』という本をえらびました。どうしてこの本をえらんだかというと、あらすじを見てみんなが「しゅく題わすれたい！」と言い始めた所がおもしろそうだったからです。

この本では、最しょに主人公のゆうすけくんがしゅく題をわすれた所から始まります。

それから四年二組は一日に一人ずつしゅく題をわすれることになりますが、とちゅうから理由が思いつかずに「わすれたくない。」と言い出して、クラスでけんかになってしまいます。次の日先生が作るのをわすれました。理由は色々とあり、最後はクラスが一つになれました。

このお話を読んで、私は最しょから「しゅく題をわすれたくない。」と言って、反たいしました。なぜかというと理由が思いつかないからです。

だけどこの話では最しょは「わすれたい。」と言っていましたが後から大へんになってやめたのだと思います。

次は心にのこった所です。一番心にのこった所は先生がしゅく題を作るのをわすれた理由です。先生は、白いりゅうのお母さんがくしゃみで学校のベランダにおとしてしまった赤ちゃんりゅうをさがしに来て、先生がかぜをひいているお母さんりゅうに、たまご酒を作ってあげたけれど、よくふっとうするのをわすれて白

いりゅうが赤いりゅうにかわり、よっぱらってしまったという作り話を、宿題を作りわすれた理由にしたところです。そしてせいとたちも先生の話にあわせて、「よっぱらったから大雨をふらしたり雷を鳴らしたりしたんだね。」と話をしていて、とても楽しいクラスでいいなと思いました。

この本を読んで、作者は『楽しい想ぞうをするのが大切だよ』と言いたかったと思います。私も大切だと思います。想ぞうすると自分も楽しいし、クラスもみんながわらって明るく楽しいクラスになるし、想ぞう力がたくさんつくからです。想ぞう力がたくさんつくと、いいアイディアがうかんで物を発明したりできます。

私は大人になったら想ぞう力をはたらかせて、色々な人にやくだつ物を発明したり、子どもたちも楽しんでくれる、遊び道具などを発明したいです。

【講評（こうひょう）】
まだ三年生ですが、分かりやすく、読みやすい上手な感想文が書けています。自分なりに作品をとらえ、解釈（かいしゃく）できているところも良かったです。想像力を広げて、色々なものを発明してくれるのを楽しみにしています。

★ 佳作

「しっぱいにかんぱい！」

鴛泊小学校　三年　入井（いりい）　綾花（あやか）

みなさんは、しっぱいをしたことはありますか。わたしはあります。たとえば、テスト問題で記号で答えると書いてあるのに文字で書いたり、ダンスの回り方を右なのに左に回ったりなどしっぱいしてます。その時の私は、またやってしまったとはんせいします。お父さんは、しっぱいと思ったらしっぱいと言ってます。お母さんは、おこってしまった時をしっぱいと言ってます。お兄ちゃんは、サッカーやけん道の時しっぱいしたなぁって思う時があるみたいです。

この本は、かなさんがさい後の運動会のリレーでしっぱいしておちこんでいる時に、まわりのみんなが自分たちのしっぱい話をしてわらった話です。かなさんは、ごはんも食べられないぐらいおちこんでいました。私も合同リレーのアンカーだったので、もし自分が同じようなことになってしまったらどうするか考えました。わたしは走ることがすきなので、もしかしたらかなさんのようにごはんを食べられなくなるかもしれないし、それよりもまわりの人に何を言われるかが一番こわいかもしれないと思いました。ぎゃくに、もし他の人がしっぱいしたらどうやって声をかけるのかも考えました。ほうっておく方法もあるし、かなさんのおじいちゃんみたいに前むきにはげます方法もあると思いました。

この本をよんで、かなさんの弟が何もできなくて、気もちがもやもやしているすがたをみてわたしはおうえんしたくなりました。

また、かなさんのおじいちゃんがうまくみんなのしっぱい話をいやなかんじに思いださせないようにしているすがたに、すごいと思いました。大きなしっぱいをしたら、一人では立ち直るのはむずかしいけど、まわりの人たちがはげましたりすることで立ち直ることもできると思いました。またしっぱいはわるいことではないとあらためて思いました。

「しっぱいにかんぱい！」

【講評】
問いかけから始まっているところがいいですね。作品の伝えたいことをしっかりとらえ、自分の経験や考えと合わせながらうまくまとめて書けています。最後の終わり方も、他の感想文と違ってよかったです。

★ 奨励賞

「ハチと上野先生」

鴛泊小学校　三年　上野　日向汰

ぼくがなぜこの本を読むことにしたかというと、ぼくとこの本に出てくる先生が同じみょうじだったからです。

この本を読んで、心にのこった場面は先生がかっている犬のハチが上野先生が死んでもわすれなかった場面です。その中でもとくに心にのこった行動は、上野先生がしぶやえきに行っているのをわすれないで、同じ時間にしぶやえきに行ってた事です。理由は、毎日帰ってくるとしんじて行っているのがすごいと思ったからです。

心にのこった登場人物は、ハチと上野先生です。にているところは、うちの犬はぼくが、学校から帰ってくるとしっぽをふってこっちに来てくれるので、ハチとにています。

次に作者が言いたかったとても大切な事は、ごはんをあげたりさん歩につれて行ってあげるからです。つまりあいじょう持ってそだてたら犬はかいぬしを一番好きになります。みなさんは、それを大切だと思いますか？ぼくは大切だと思います。どうしてかと言うと、かいぬしが犬を大切にそだてないと犬は、かいぬしの事を、きらいになるからです。

ぼくはどうやって犬を大切にするかというと、ごはんをあげたりさん歩につれて行ったりなでてあげます。ぼくの犬は、年をとってきているので、びょう気になったりするかもしれないけどぼくは死ぬまで育てます。

【講評】
感想文を読んだ人へ問いかけをするなど、工夫が見られました。自分が飼っている犬への愛情が伝わってきたところは、素直に書けたからこそだと思います。上野先生のように愛犬との絆をこれからも大切にして下さいね。

小学校四学年の部

☆　優秀作

「びんぼうとまずしいのちがい」

鴛泊小学校　四年　近江（おうみ）　優翔（ゆうと）

「びんぼうとは少ししか持っていない事ではなく、むげんによくがあり、いくらあっても満足しないことです。」

ぼくはこの言葉にきょうみを持ち読んでみようと思いました。

この言葉はウルグアイの大統領がかんきょう悪化した地球の未来について話し合う会議でしたスピーチです。

ウルグアイの大統領は給料のほとんどをまずしい人たちに寄ふし農場でおくさんとくらしています。

ぼくは大統領をテレビの中でしか見たことがありませんが、大統領といえば大きな家、大きな車やぜいたくなくらしをしているイメージですが、この大統領は牛や羊と自然の中でくらし、ニワトリにえさをあげてから自分で運転して仕事に行く事におどろきました。

大統領は「人よりゆたかになるためにきょうそうをくりかえし、人を思いやる気持ちをわすれてしまっている。」と言いました。

ぼくは母に「自分だけがよければいい考え方や行動はやめなさい。」とおこられた事を思いうかべました。ぼくは自分だけがよければと思って行動をしているわけではないがそうなってしまう事があります。そのせいで悲しい思いやいやな思いをしている人がいることを注意されて気づくことがあります。そして、またやっちゃって自分も悲しくなります。

大統領は「地球かんきょうのききではなく、私たちの生き方のききでこのままでいいのか考え直さないといけない。」と言いました。

ぼくはよくわからないのですが、働いてほしいものを買うのは悪い事ではないと思います。でも使いすて、次を買いまた捨てるをくりかえすのはよくないと思います。

ぼくはまだはたらいていないのでほしい物があってもすぐに手にする事はないけれど、新しい物を見たらほしくなるし、たん生日に買ってもらうと今までやっていた物はやめて新しい物をやります。結局と中の物ばかりです。大統領の言う「よく深さ」はこういう事をいうのかなと思いました。

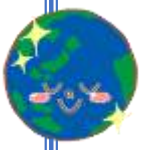
ぼくは大統領は質そな背広や古い車で自分で野菜を作って食べ、他の大統領よりまずしい生活をしているけれど、幸福でよりよい生活をしていて「びんぼう」ではないと思いました。

ぼくはべん利になる事はいい事だと思うけれどその後の生活が悪くなるのはよくないので、かんきょうにも良く、べん利な世界になっていけばいいと思います。

ぼくはまず、自分だけが良ければの行動を気をつけて人を思いやる気持ちを持てるようにがんばってみます。

【講評（こうひょう）】

本の内容と自分の生活、母の思いなどうまくおりまぜながら書けている作品ですね。「豊かとは何か」「幸福とは何か」その答えは、とても難しいですが、近江君が感じたことを近江君なりのやり方で、ぜひ行動にうつしてほしいです。四年生ですが、難しい内容のものを選び、本と上手に対話できたことがうかがえる感想文でした。



★　佳作

「かあちゃん取扱説明書」を読んで

鴛泊小学校　四年　渡邊（わたなべ）　拓斗（たくと）

ぼくは、「かあちゃん取扱説明書」という本を読みました。題名にひかれたのもあり、きょう味があったからです。

ぼくは、「かあちゃん取扱説明書」を読んで、どうして母親というものは、子どもをしかるんだろうと考えました。

この本、毎日ガミガミ言っている母ちゃんと息子の哲哉とのやりとりです。はじめに哲哉の作文には、

「ぼくんちで一番いばっているのは、母ちゃんです。父ちゃんよりもずっとおっかないし、いばっています。」

という所では、ぼくもよくおこられるしもしかしたら自分のお母さんがなぜおこるのかがわかるのではないか？と思いました。

心に残った人物は、やはり哲哉です。哲哉は母ちゃんをとにかくほめる。そうすると、きげんがよくなる。母ちゃんの扱いかたをマスターするとおこづかいやゲームも哲哉の思い通りになるんだ。そう考えたのですがもしぼくが哲哉と同じようにお母さんのきげんがよくなるようなことをしたとしてもお母さんは全部お見通しで、うまく行くわけないと思います。

お母さんは、ぼくのこと、心の中全部分かってしまうすごい人だからです。

たしかに哲哉のように、おやつをいっぱい食べたい、ゲームを好きなだけやりたい、ぼくも同じ気持ちになることあるけど、お母さんがうるさくダメです。と言うこと、おこること、それには理由があるのではと思うようになりました。

はじめ、ぼくは、この本を読めばお母さんにおこられない方法が見つかると思っていました。

だけど見つかることはなく、一つわかった事があります。それは、親は理由もなく子どもをしからないという事です。一番に考えてくれているから、いつも気にかけているから、少しでもぼくがちがう道を行ってしまった時には、正しい道を教えてくれているのです。

だから、ぼくは時々、おこられながらも、お母さんとうまくつき合っていきたいです。

【講評（こうひょう）】

作品の内容と自分の考えを上手くまとめている感想文でした。本を通して母の気持ちを想像し、これからのことを考えることができましたね。自分の素直な考えを述べていて、とても共感できました。

★　佳作

「ココロ屋」を読んで

利尻小学校　四年　荒澤（あらさわ）　光惺（こうせい）

この本は、ひろきが親友のゆうやとけんかをして、みか先生に「ココロを入れかえなさい。」

と言われてしまい、教室からにげ出したひろきの前に、ココロ屋があらわれて、自分のココロを、やさしいココロ、すなおなココロ、あたたかいココロ、に入れかえるお話です。

ぼくはこの本を初めに見た時、ココロ屋は自分の好きなココロを作ってくれるお店だと思いました。でも、ココロ屋は一つのココロとしか入れかえることができませんでした。

ぼくは、ひろきくんとせいかくがにていると思います。なぜなら、ぼくはゆうやくんのような弱くてずるい子がいたら、イライラしてしまうと思ったからです。

ひろきはやさしい人気者になりたいと思ったから、ココロ屋にやさしいココロやあたたかいココロと自分のココロを入れかえてもらったんだと思います。ぼくは、ひろきがやさしいココロに入れかえてもらった時、自分のココロがまだあったと思います。なぜなら、給食の時、自分の好きなプリンやメンチカツを取られて、自分のきらいなすの物を山もりに入れられても、やさしい心だけならいやにならないと思ったからです。だから、やさしいココロもきょくたんすぎると、言いたい事が言えなくて、いやなことをがまんしなきゃならないし、やさしすぎたせいで、人をおこらせて、きらわれてしまうこともあるからです。やさしいココロも大切だけど、やさしいだけじゃ自分もみんなも、良い気もちになれないと思います。

もしぼくがひろきだったら、ゆうかんなココロをえらんでると思います。ゆうかんなココロだと、勇気があってすなおすぎないと思ったからです。

この本を読んで大切だなぁと思ったことは、いろんなココロがまざりあってるから、いろんなことを考えられて、いろんなことを思うことができるんだなと思いました。

ぼくにはせっかちなココロとこだわるココロがあるので、やさしいココロを育ててやさしい人になりたいです。

【講評（こうひょう）】
本を読んでいない人にも、内容が伝わる感想文ですね。自分と主人公を比べたり、自分の考えを素直に表現できたりしているところが良かったです。ぜひ、優しいココロを育てていってくださいね。

★ 奨励賞

「南極のタロとジロ」を読んで

鴛泊小学校　四年　渡辺（わたなべ）　善太朗（ぜんたろう）

ぼくがこの本を読んだ理由は、昨年東京で南極観測船「宗谷」を見学して、カラフト犬のことを知ったからです。ぼくは犬が好きです。ですからこの本を選びました。

ぼくは、「南極のタロとジロ」を読んで、なぜタロとジロと隊員は、絆を結べたのかを考えました。

この本の中で一番心に残った場面は、隊員たちがふたたび南極に行った時に、生き残っていた、タロとジロが隊員に気付いて、しっぽをふってかけよってきた場面です。

なぜタロとジロが生き残ったのか。読んでいくうちに、タロとジロは兄弟犬でおたがいに助け合って、ペンギンなどをとっていたからです。もし兄弟犬ではなかったらどうだったでしょう。海

に落ちていたかもしれないし、シャチに食べられていたかもしれません。他の十三頭も、タロとジロに付いてくれば、十五頭全員が生き残ったのかもしれません。

大変なことが考えられる中、タロとジロが生き残ったのは、きせきだと思います、

ぼくは、おじいちゃんの家で飼っている、秋田犬の「すずちゃん」を夏休みの間お世話しました。散歩も一人で行けるようになりました。ぼくが庭に出ると、ぼくを待っていたかのように、しっぽをふって喜んでくれます。

タロとジロは隊員をわすれていなかったので、次に会えるのを、すずちゃんもきっとぼくと会えるのを楽しみにしてくれると思います。

この本を読んで、一人ではできないこともできるということだけではなく、生きるというむずかしさと、人間と動物の間にも絆ができるということがわかりました。

ぼくは犬がほしいです。悲しい別れもけいけんしましたが、犬といっしょにくらすことはすばらしいと思います。タロ、ジロと隊員のように、ぼくも犬と絆を作りたいです。

【講評（こうひょう）】

読書を通して考えたことを自分の経験（けいけん）と照らし合わせ、素直な言葉で書けているところが良かったです。犬が出てくる本は、この他にもたくさんありますから、幅を広げて読んでみても面白いかもしれませんね。

小学校五学年の部

☆　優秀作

「武器より一冊の本をください」

鴛泊小学校　五年　杉本（すぎもと）　天音（そらね）

「本とペンを手にとり全世界の無学、貧困、テロに立ち向かいましょう。一人の子ども、一人の教師、一冊の本、そして一本のペンが全世界を変えられるのです。」これは、史上最年少でノーベル平和賞を受賞したマララ・ユスフザイさんの国連スピーチの一文です。

マララは、パキスタンに住む十五歳の少女でした。二〇一二年通学とちゅうに、タリバンというイスラム民兵の銃撃にあいます。彼女が住むパキスタンには、女の子には、教育を受ける権利を認めないという考えの人たちがいたのです。

マララはとても勇気があります。ブログやカメラの前で命の危険をかえりみず、教育を受ける権利と表現の自由を世界中の人にうったえ続けました。マララは人々を助けるにはどうすればいいか、どうすればその運命を変えられるのだろうといつも考えていました。その勇気は自分のためだけではありませんでした。

私は、学校の授業中うるさくしている人に注意できないことがあります。注意をしたらその人にきらわれるかなと思ってしまい、できないのです。でも、注意をしないのは、自分がきらわれないためなので、その人のためではありません。私は、マララとちがって、自分のことだけ考えているのです。

マララは、初め勉強をして医者になることが、夢だといっていました。
でも最後では、政治の道に進んで紛争を解決したい、そして、パキスタンを救いたいといっています。
私はしょう来、学校の先生になりたいと思っています。親がやっていてなりたいと思いました。でも、他の人のために先生になろうとは考えていませんでした。これからは、私も、マララのように、自分のためだけではなく他の人のためにこんなことをしたらいいなという視点でしょう来を考えてみたいと思います。

【講評（こうひょう）】
高学年らしい平和をテーマとした作品を選んでいるところに好感が持てました。本を読んで、マララと自分を対比し、どう生きていくか、自分なりに考え、述べているところが素晴らしかったです。

★ 佳作
「いつも心の中に」を読んで

利尻小学校　五年　熊谷（くまがい）　爽汰（そうた）

ぼくが、この本を選んだわけは、本の帯を見て、「これ、いいな」と思い、中を少し見て、「読みたい！」と思ったからです。
このお話は、さつきさんのおかあさん、みずきのお話です。ある日、大好きなお父さんを亡くしてしまいます。そのショックで、学校に行けなくなります。担任の先生には、「心の病気」と言われ、心配したお母さんが、夏休みの間、アメリカに住むおばさんのまやさんのもとへ連れて行きます。その後、サンクチュアリーという動物を保護する施設で、体験学習を何日も続け、まやさんという最後の日に、まやさんからお父さんの手紙をもらいます。その手紙は、みずきのために書いていたものでした。
特に印象に残った場面は、サンクチュアリーからの帰りに、いつもは思い出していたお父さんを、思い出さず、車の中でお父さんは、『いつも、心の中にいる』そう思った時、みずきの悲しみは消え、ふとお母さんのことを考えました。サンクチュアリーにこさせてくれたのは、お父さんを忘れさせるためではなく、「いつも、お父さんといっしょだよ」と思えるようになってほしかったからかもしれない。お母さんもお兄ちゃんもそんな気持ちになれてたらいいなと、みずきの心の変化がえがかれていた場面です。
もしもぼくが、主人公だったら、お父さんを亡くすと悲しくなるし、親元をはなれて、遠いアメリカで生活するなんて考えられません。さらに、英語なんて話せません。きっと一人で悲しくて泣いてしまうと思います。でもみずきは、それにたえて、夏休みを過ごしていたのですごいと思いました。
本の最後の方に、こんな文章があります。
『命と命は助け合って、「ありがとう」を言い合って、たがいをささえ合いながら、生きていくことができる。ひとつきりの命を、だからわたしもいっしょうけんめい、生きていこう。お父さんといっしょに、今、ここにあるこの命を、いっしょうけんめい。』
この文章を読んで、ぼくも命を大切にして生きていきたいと思いました。なぜなら、自分の命は一つしかないからです。命は大事です。今しかできないことをたくさん経験して、りっぱな人になりたいです。

【講評】
本を読んだ感想が素直に言葉で表されているところが良かったです。「もしも、ぼくが主人公だったら」など、想像の幅を広げて自分の考えが書けているところに高学年らしさが感じられました。

★ 佳作

「森に学校ができた」

利尻小学校　五年　冨岡　小華

私がこの本を選んだ理由は、来年利尻小学校が完成するし、この本は、森に学校ができるという共通するところがあっておもしろそうだったからです。

ある森にダンというこぐまがいました。いつもお母さんに「あぶないことはしないでね。」と言われています。だけど、ダンがつたでブランコを作って友達とのっているときにダンは、「みんなでのろうよ。」と言い出して、みんなでのったとたん、つたがおれてみんなけがをしてしまいました。そして、森の集会のときに友達のお母さんや、お父さんがすごくおこってしまいました。そのとき、ふくろうのおじさんが、「森に学校を作ってみてはどうかな?」と言って、学校を作りました。みんな教えてもらったことをしっかりできていました。最後はダンたちが冬眠してしまったけど、この日からダンたちがもどってくる春まで、冬眠をしたがっていたうさぎのジャッキーは、学校を一度も休まなかったというお話です。

この本を読んで心に残ったことは、みんなが学校に通ってから、ダンたちが動物たちに親切になったり、おたがいに友達を助け合ったりするようになったことです。

もし私がこのお話の主人公だったら、もう少し友達にけがをさせないように、木の実をさがしたりして、安全な遊びをしたいと思いました。

この本を読んで大切だなあと思ったことは、みんなにめいわくをかけても、その分助け合ったりしていることがすごく大切だなあと思いました。私は勉強中などなかなか意見とかを出せないときがあるけど、みんながいろいろとヒントをくれて自分の意見を言うことができました。

わたしはこの本を読んで、もっと友達と仲良くしたいと思いました。

【講評】
丁寧に取り組んでいることが伝わる感想文でした。来年学校が新しくなる今だからこそ選べた一冊でしたね。新しい学校でも、この本に出てくる動物たちのように友達と助け合い、仲よく学校生活を送って下さいね。

小学校六学年の部

☆　優秀作

「サラとソロモン」を読んで

鴛泊小学校　六年　髙橋（たかはし）　暖（のん）

私がこの本を選んだ理由は、この本の表紙に「幸せの秘訣」という言葉が書いてあったからです。幸せの秘訣とはどんなことだろう、と興味を持ったので、この本を選びました。

この本は、毎日が退屈だった少女・サラに、賢いフクロウ・ソロモンが幸せになるための秘訣を教えるお話です。

このお話の中で心に残った場面が二つあります。

一つ目は、ソロモンがサラに「味わい愛でる」方法を教える場面です。サラは、弟のジェイソンとその友達のビリーに毎日、毎日いたずらをされていました。そのことに対してサラがイライラしていると、ソロモンがその方法を教えました。私は、この方法はとても良いなと思いました。考え方を変えるだけで自分も相手もいい気持ちになれるからです。

二つ目は、ジェイソンとビリーがソロモンをうち殺してしまった場面です。だけど、死にかけているソロモンは、サラにこう言いました。

「サラ、このもみくしゃになった体とソロモンを混合してはいけないよ。この体は、ソロモンが物事を見たり聞いたりするための、今だけの間使っている道具なんだ。」

と。

私はサラと同じ気持ちでした。サラも、体がなくなれば話したり、遊んだりできないのにどうして生きていると言えるの?という考えを持っていました。私も、「死」がない世界など、どこにもないと思いました。なのにソロモンは自分をうち殺したジェイソンとビリーをうらんでいないし、自分は生きていると言ったのです。

この本を読み終えて、私は作者がこの本を通して伝えたかったことを考えました。そこで私が出した結論は、「自分の心は自分の気持ちに左右される」ということです。ソロモンは、味わい愛でる方法を教えるときも、うち殺されたときも、自分が良い気持ちになれる考え方をしていたのです。

よく、このようなことを「自己中」という人もいますが、ソロモンは、自分が良い気持ちになるとき、相手にも良い気持ちを伝えるためにしていました。

作者もそのことを伝えたかったのだと、私は思います。私も、おちこんだり、イライラしているときには嫌な気持ちになるけれど、好きなことをしているときはとっても楽しいです。なので、気分が悪いときと良いときとの差は自分でコントロールしているんだ、と思いました。なら、幸せになれる方法も自分で見つけられると思うので、これからはそのことを意識して生活していきたいと思います。

【講評（こうひょう）】

作者の伝えたいことをしっかりと考え、自分の意見と照らし合わせることができています。自分の考えの理由を本文中から抜き取ることで、読み手にわかる文章になっています。また、自分の考えが分かりやすく、簡潔に書けています。本を読んで考えたこと、本を通して感じたことを、自分の生活と上手く結びつけて書けているところも良いです。

★　佳作

「一歩引いて考える」

利尻小学校　六年　村井（むらい）　言寧（ことね）

みなさんは、「冒険をしてみたいな、」と思ったことはありませんか。ぼくは、たまに何もすることがなく、平和な時に、「何か起きないかな」、「冒険したいな」、と思うことがあります。ぼくが読んだ、この「十五少年漂流記」では、ふとしたことから十五人の少年達と一匹の犬を乗せた船が、荒海に出てしまい、流れ着いた無人島で生活し始ます。ぼくは、最初は「少年達だけで生活できるんだろうか」と思いながら読んでいましたが、少年達はどんなピンチになっても、あきらめず、力を合わせて切りぬけていて、最後は安心して読んでいました。そこで、これからぼくがこの本を読んで驚いたことを二つ紹介します。

一つ目は、この物語には、特定の主人公がいないということです。ある人物の気持ちが書かれていることはありますが、その気持ちを書かれている人物は、常に入れ替わっています。ぼくは、これは今の社会では同じだと思います。なぜなら、この世界には主人公という物が無いからです。この世の中にはたくさんの人がいますが、その中に主人公はいません。主人公がいるのは物語の中だけなのだとぼくは思います。

二つ目は、ふつうの冒険物の本とちがって、あきらめる人がいるということです。どういうことかというと、ふつうの冒険物の本では、みんなあきらめずにがんばる、という感じですが、この「十五少年漂流記」では、あきらめる人も、あきらめない人も両方います。ぼくは、これも、今の社会と同じだと思います。なぜなら、この世の中には、いろんな人がいます。ですが、一人として同じ性格、同じ考えの人はいません。この本は、今の社会の縮図だとぼくは思います。

最後に、ぼくがこの本を読んで、大切だな、と思ったことを紹介します。それは、世の中に、まったく同じ人はいないということです。

ぼくは、前に意見がちがう人に、なんでわかってくれないんだろう、と思ったことがあります。しかし、この世界にまったく同じ性格、同じ考えの人はいないので、意見が対立して、言い合いになるということも、ありえなくはないのです。だから、ぼくはこれからは、意見が対立しても、すぐに言い合わずに、まず一歩引いてみて、相手の意見のいい所を見つけてみたいと思います。

【講評（こうひょう）】

感想文の書き出しが、他と違い、インパクトがあり、面白かったです。読む視点が独特で個性があったところも良かったです。自分の考えもよく書けています。読書好きなことが伝わる感想文です。

★　佳作

「走る少女」を読んで

利尻小学校　六年　牧野（まきの）　海結（みゆ）

この本は主人公の比呂が陸上部に入ってお兄ちゃんのために走っていくお話です。

私はこの物語を最初に読んだ時、比呂はお兄ちゃんの足のことや、メンバーの中でのいざこざなどがあったのに、それでも走り続けていてすごいなと思いました。

私は比呂と同じような体験をしたことがあります。比呂は事故がきっかけで走れなくなったことがありました。私はダンスを習っていて、みんなについていけなくて泣きたくなった時がありました。でも同じチームのみんなや一緒にダンスの練習をしてくれる子が教えてくれたりして、できるようになったことがあります。そのおかげで今もがんばろうと思えるし、すごく楽しくて前よりもダンスが大好きになりました。

私が心に残ったところは比呂が陸上部でいっしょうけんめいだった所です。私はすごく運動が苦手で走ることがきらいでした。でも比呂ががんばっている所を見ると、私も運動を積極的にやろうという気持ちになりました。これからはマラソンなど最後までいっしょうけんめいやっていきたいです。

私がこの本を読んで大切だなぁと思ったことは、他のメンバーと協力するということです。私も運動会などで協力してゴールする競技がありました。誰かが失敗すると責めちゃう時もあったけど、本番に心を一つにして相手のチームに勝つことができました。なので、誰かと協力するのは大切だなぁと思いました。

この本を読む前は、女の子が走るお話かなと思っていました。でも本を読んだ後、比呂がメンバーと協力し、最後まで努力してすごいと思いました。

私も比呂みたいに、誰かのためにいっしょうけんめいなれるようになりたいです。

【講評（こうひょう）】
本の内容や感じたことから、自分の思いや考えを書き表すことができています。関連づけて、自分を変えようとしているところにも好感がもてました。字も、きれいに書けていて、丁寧に取り組んだことが伝わってきました。

★　奨励賞

「妖怪アパートの幽雅な日常」を読んで

鴛泊小学校　六年　寺田（てらだ）　ひよの

この本を読んで、私が学んだことは、二つあります。

一つ目は、「ふつう」とは何か。ということです。妖怪、幽霊という、ふつうは見えない人間以外のものたちと一緒にくらすということは、思いっきりいままでの「ふつう」が変わってしまいます。なので、「ふつう」というのは何だ?と考えてしまいました。私もいろいろな「ふつう」を考えてみましたが、すべて少しちがったりしました。例えば、

「子どもは、平日べんきょうをする。」

これは、私たちは、義務で決められているので、夏休み、冬休み、春休み以外は、平日べんきょうをしています。けど、世界では、戦争などで、べんきょうできない人がいます。なので、みんな一緒とはならないのです。

他に、日本の中では、夏休みと、冬休みの長さのちがいがあります。北海道では、長さが半分ずつなのに対して、東京などでは、夏はあついのでべんきょうが進まないので、夏休みが冬休みの方

より長いので、一緒とはならないのです。なので、この本は、またちがう「ふつう」を味わい、そして、「ふつう」とは何か考えられました。

二つ目は、親と子どものきずなです。この本の主人公は、三年前に親をなくし、親せきの家にあずけられていた男の子です。そのあと、妖怪アパートに来て、「クリ」という子どもに会います。その子は、母親にぎゃくたいをさせられて死んでしまった幽霊です。けど、母親とクリとのきずながあって、それがざんこくなきずなだとしても、母と子というのは事実。ということがわかりました。

私は、父親がりこんしていません。けど、私と父は、父と子というきずながあって、それは、一生切れない。ということを学びました。そしてまた親と子どものつながりを感じました。私もふと、父親のことを考えることがありました。考えてみると、楽しいことも、悲しいこともいっぱいありました。

わたしは、この本を読んで、ふつうとは、かんきょうによってかわることと、どれだけはなれていても、親と子どものきずなは切れない。ということがわかりました。わたしも、自分の「ふつう」を考えなおし、たまには、父親との思い出を思い出そうと思います。

【講評（こうひょう）】
結論から書いていて分かりやすいですし、自分の意見をしっかりと述べている感想文でした。本を通して、自分自身と対話することができている、六年生らしい作品だなと感じました。

中学校の部

☆ 優秀作

「島はぼくらと」を読んで

鬼脇中学校　三年　寺島　凪咲

「いってらっしゃいは、いいっぱなしの言葉じゃない。」登場人物と同じく、島に住む私は、このセリフがとても心に残りました。

私は自分が住んでいる利尻島が大好きです。なのでこの本のタイトルに興味を持ち、読み始めました。

この本は、高校を卒業したら離ればなれになってしまう幼馴染四人の最後の一年の物語です。その四人以外の登場人物も個性豊かで、それぞれの人生のドラマがえがかれています。

その中でも、私がとても印象に残った場面が三つありました。

一つ目は、脚本家になることが夢の高校生、新が書いた作品を、霧崎という作家が自分の作品としてコンクールに出し、入賞してしまう。という場面です。私が新の立場だったら自分が頑張ったのに、いい所だけ横どりされたことに落ちこみ、ネガティブにとらえてしまうと思います。でも新は、自分の作品がみとめられたんだ。と、ポジティブにとらえます。栄誉にとらわれずに、評価を素直にうけとれる新はすごいと感じたと同時に、私も新のように夢中になれる夢をみつけたいと思わされました。

そして二つ目は、高校生の衣花が島の決まりで進学せずに島に残り、みんなを見送らなければいけないことに、涙がとまらなくなる場面です。本の中で衣花は、島を出たいわけじゃない、みんなとここでくらしていたいんだ。といっています。私はこの言葉にとても共感しました。私も

中学校最後の年で、進学によって離ればなれになってしまう友達がいるからです。ずっと一緒にいることがあたり前だった。だからそのあたり前が壊れるのがこわくて不安なのです。この場面は特に、自分とかさねながら読むことができました。

最後に三つ目は、衣花と仲のよかった朱里が、島に帰ってきて、それにたいして衣花がずっといいたかった「おかえり」を言う場面です。見送ることしかできなかった衣花が、ずっといいたかった言葉です。この場面をみて、「いってらっしゃい」は「おかえり」のためにあるんだということを考えさせられました。

この本の中には、「島の子供はいつかここを去ることを前提に育つ」という言葉がでてきます。でも、去るだけではなく、ちゃんと帰ってくるのです。島には自分の大切なものがたくさんあるから。私も高校の三年間を終えたら、一度島を出ようと思っています。でも必ず戻ってきたい。そして、「おかえり」と言ってもらえるような人になって帰ってきたいです。「いってらっしゃい」はいいっぱなしの言葉じゃない。「いってきます。」が返ってきて、ちゃんと「おかえり」につながっていくのです。

【講評】

幼い頃からずっと一緒に過ごしてきた仲間と、進学によって離ればなれになってしまう不安…利尻島で暮らしている皆さんに通じることが、この本の中にはたくさん溢れていて、そこから感じた豊かな気持ちを、丁寧に表すことができましたね。

「『いってらっしゃい』は言いっぱなしの言葉じゃない。」というセリフを受けて、「『いってらっしゃい』は『おかえり』のためにある」と考えた寺島さんの言葉に、私も共感します

これからの人生、生まれ育った利尻島を離れて生活することがあるかもしれません。そんな時にはきっと、不安な気持ちもついてくることでしょう。ですが、島に帰ってきたとき、「おかえり」と迎えてくれる人が、必ずいます。「おかえり」と言ってもらえるような人になって帰ってきたい。その前向きな心をいつまでも忘れずに、豊かな人生を歩んでください。

☆ 優秀作

「人のためにできること」

鴛泊中学校　二年　山本　彩心

あなたは他人のために何をすることができますか。何かをしたことがありますか。この『93番目のキミ』という本は、感情を持ったロボットと人間が共に成長していく話です。

私は、この本からたくさんのことを教わりました。その中でも一番印象に残ったことは、他人のために行動ができる大切さです。主人公の也太は偶然出会った姉弟の都奈と和毅、そしてロボットのシロによって、自分優先だった人生が自分以外の人の力になりたいと心の底から思えるように変わっていきます。私は、こんなにも人は変われるのだなと、出会いの大切さを感じました。

都奈は困っている人のためにボランティア活動をしていました。その

理由を聞いてみると、「恵まれた身体に生まれて、恵まれた環境で育ってきたからかな」と言っていました。私は、はっとしました。なぜなら、恵まれていることを当たり前に思っていたからです。今の自分が、健康で恵まれた環境で生活できていることにもっと感謝して生きていかなければならないと、改めて感じました。都奈のような人がこの世界中に増えてほしいなと心の底から思うことができました。

ロボットのシロは和毅が右足を失ってしまった時に、自らが義足になりたいと言いました。私はとても驚きました。絶対にこのような行動はできないと思います。ですが、よくよく考えると本当に大切な人だからこそできる行動なのではないでしょうか。シロは、人間よりも人間らしいなと思いました。私は都奈やシロのような、人のために優しさを持てるようになりたいです。

今、ロボットの開発がどんどん進み、ロボットと共存する時代がやってきます。すでに、ロボットが働く、ホテルやレストランがあると聞きました。私は、そのような時代がきたら、ロボットが便利な道具としてではなく、シロのような優しさと思いやりがあるロボットにいてほしいなと思います。その頃には、他人のために行動できる大人になっていたいです。一歩ずつ、一歩ずつ、勇気をふりしぼりながら。

【講評】
「人とはどうあるべきか」という問いに対する答えを、作品に登場するロボットの中に見出していた点に感心しました。時に私たちは、「この地球を動かしているのは我々人類だ」とおごり、大切なことを見失ってしまいます。これからも、身近な人やものから学ぶ謙虚な姿勢を忘れずに生きていってください。

★ 佳作

「暗黒女子」を読んで

鬼脇中学校　三年　門脇　あかね

私は、一回目この作品を読み終わった時と二回目読み終わった時、感想が変わっていることに気付きました。初めに読んだ時は、
「なんて歪んだ性格をしているんだ」
と、登場人物達から引いた目線で感想を抱きました。しかし、この感想文の為に読み返すと、今度は
「果たして彼女達は本当に歪んだ性格なのだろうか」
といった疑問のようなものが浮かんだのです。

確かに、亡くなったいつみを始め、七人の犯したことは、法的にも道徳的にも、良い事であるとは言えません。しかし、彼女たちの考えた事はきっと、私達の心にいつ起こってもおかしくないと思います。

例えば、自分の店を持つという夢が実現しかけていた小南あかね。彼女は洋食屋の計画を簡単に取り止めてしまった父への憎しみから、父の料亭への放火をしています。彼女がもう少し大人だったら、もしくは読み手が大人ならば、
「一度計画が立ち消えても、他の方法で夢を叶えることが出来るのではないか」
と考えるかもしれません。しかし、私が彼女と同じシチュエーションにあったなら、きっと彼女と同じ考えをしてしまうと思います。
「自分の人生と同等とも言えるものをうばった相手に、同じ事をやり返してやりたい。」
もちろんそんな事をした所で、失ったものは返ってはきません。単なる自分の自己満足に過ぎないでしょう。でも、彼女にとって、そう考えて

いる者にとって、きっと失ったものが返ってくるかどうかなど、関係がないと思います。理屈や正論を抜きにした、自分の信じる事物や、自分の感性。それが彼女を動かしていた最大の力ではないでしょうか。他のキャラクター達も同様です。

自分のしたい事を邪魔するものを排除したい。常に自分が主役であり、輝きたい。

きっと自覚無自覚関係無く、一度は誰しもが考える事です。そして彼女らも、それぞれに思う所があって、罪を犯したのだと思います。

だからといって、やって良い事と悪い事があること位、私にも分かっています。

彼女達がした事の中で、良かったのは自分の信じることを突き通したこと。悪かったのは、その突き通し方が、酷く歪んでいたこと。

なので、私は彼女達と同じように信じることを最後まで突き通し、また彼女達のようにやり方が歪んでしまわないようにしたいです。

【講評】

登場人物の「彼女たち」の行動から、共感できることや、間違っていると思うことなど、自分の考えをしっかりと整理し、丁寧に書くことができていました。読書感想文を書くには、少々難しい本だったと思いますが、この本を通して、人の心の中に潜んでいるかもしれない「闇」や「歪み」について、一つの面から見ただけではわからないことを、深く考えられたのだと感じました。正しいこと、そうでないことをしっかりと区別し、判断していくことが大切ですね。

★佳作

「海の見える理髪店」

鬼脇中学校　二年　箕輪　萌華

もし「あの時」に戻る事ができていたら、今家族三人で幸せに暮らせていた。あの時呼びとめていたら、きっと何かが変わっていたのかもしれない。この本は亡き娘と両親の永遠の絆を描き、家族の大切さを教えてくれる物語です。

主人公の鈴音さんは、母親と口論してしまい、二日間会話をしていませんでした。そんな二日目の朝、いつも以上に慌ただしくまともな会話もできないまま、両親は彼女を送り出してしまいました。唯一かわした言葉、それは「行ってきます。」この五文字だけでした。その言葉が娘との最後の会話になりました。登校中、交通事故に遭ってしまい、意識が戻らず、一五才という若さで彼女は亡くなってしまいました。両親は、あの時もう一言声をかけてあげていたら何かが変わっていたのかもしれないと後悔していました。

私はこの物語から気付かされたものがあります。それは家族との時間です。私もたまに両親と口論になり、不機嫌なまま登校してしまうことがあります。会話もすることなく、「行ってきます」と、ただこの一言を言って扉を閉めてしまいます。でも後々になり必ず後悔します。ほんの少しの会話でもすれば良かったと。

もしも私が学校にいる間、両親が命にかかわるような事に巻き込まれ、もう後戻りできない状態になってしまったら、自分を責め続け後悔し、一生重いものを背負いながら生きていくことになると思います。もっとたくさん話したいこと、伝えたいことなんて山ほどあります。後で言うから。とか、今度言うから。といって先延ばしにしていたら後悔すること

になります。一日一日を大切に生き、感謝の言葉を忘れず生きる。私はこのことを学びました。

両親は、娘の小さい頃から撮影し続けたビデオを見る度に、あの頃のことを思い出し辛い毎日を過ごしていました。辛くなるから見るのをやめよう。そう思った時もあり心に大きな穴があく毎日でした。そんなある日、両親は娘の代わりに成人式に出席しようと考え、勇気を振り絞って会場に足を運びました。二十歳をむかえた人達を見る度に、娘が生きていたら…と思い会場から出ようか迷っていた時、娘の友達が大勢かけつけてくれて当時の思い出を話してくれたりしました。その時の両親は娘が友達から忘れられてなかった事に安心してそれから辛い毎日が笑顔の多くなる日々に変わりました。

過去はもう変えられませんが、未来は変えられます。

自分の身、家族の身にいつ何が起こるかなんて、誰にも分かりません。今を大切に過ごし、家族といれる時を無駄にしないように過ごそうと思います。

【講評】

キョリが近いからこそ、素直に言えない気持ち。親しい人に対して素直になれなかった体験を、皆さんもきっとしたことがあると思います。「行ってきます」が最後の会話になってしまうとは思わず、登校中の我が子を亡くしてしまった両親は、どのように思ったのでしょうか。「あの時もう一声かけてあげていたら、何かが変わっていたのかもしれない」と後悔しても、「あの時」に戻ることはできません。そのことに共感し、「自分だったら…」と考えられた箕輪さん。きっと、ご両親や周りの人達を大切にして、この先の人生を生きていけるのだと思います。

「過去は変えられませんが、未来は変えられます。」この言葉を胸に、今という時間を大切に、家族といられる時間、周りの人達と関われる時間を大切にしてください。

★ 佳作

「最強の兄弟」

鴛泊中学校　三年　関　透子

母にすすめられて「重力ピエロ」という本を読み、私の中に衝撃が走った。私は今まで、兄弟と聞くと何か熱い絆のようなものを真っ先に思い浮かべていた。だがこの本の主人公である「僕」と弟の春は違う。この兄弟は私の常識とは遠くはなれた場所で存在しているような気がした。

「お前は許されないことをやった。ただ俺たちは許すんだよ」

「酷い家族だな」

「いいんだよ」

私は僕と春のこの会話が大好きだ。春のことをいつでも受け入れる、という僕の気持ちが春に届いた瞬間、春がどんなに嬉しかったのかを考えるだけで私までうれしくなってくるからだ。また、この会話から私は、人は必ず自分の居場所があることを実感できた。悲しいことがあったらこの会話を思い出そうと思う。それだけで落ちつけるような、この会話はそんな不思議な安心感があると思う。

この世界にいる人間全員が好きな人はまずいないと思う。絶対に自分とは違う考えを持った人がいるはずだ。あなたはそんな人とどう関わっていくだろうか。春は殺害という行動を取ったが、もし私が春だったら私はその相手を殺しただろうか。殺人というのは決してしてはいけないことだ。それは春も分かっているだろう。それなのに春はどうしても、殺さなければならなかった。その心情に、私は心から同情した。可哀想と言うだけなら簡単だが、その言葉を発して春の立場が変わる訳じゃない。私はそのどうすることもできないもどかしさに同情することしかで

きなかった。

そんなつらい宿命を持ってしまった春に私は一度会ってみたいとも思った。もし会うことができたら、なんと言えばいいだろうか。多分春は達観しているからなんと言ってもうんうん、とうなずいてくれる気がする。私の中の春のイメージはできあがってて、私の中の春はこれからも私の中にいるような気がするのだ。私に今までにない世界観を与えてくれたこの本を私はこれからも大切にしていきたいと思う。この本のおかけで家族というものの形を改めて感じることができた。今、私が出来る精一杯の感謝をこの本に送りたいと思う。

【講評】

何があったとしても、たとえどんな事情があったとしても、人の命を奪うことは許されない行為だと私は思います。ただ、その一方で「誰の命も奪われない世界」が実現できないことも、私たちは知っています。では、どうすればよいか。私たちにできることは「考えること」です。無理に肯定や否定をせず、そんな世界とどう向き合っていくかを、これからの長い人生をかけて考えていってほしいと思います。

★ 佳作

「君の膵臓をたべたい」を読んで

鴛泊中学校　二年　山上　紗英

私が読んだ本は君の膵臓をたべたいという本です。私がこの本を選んだきっかけは、タイトルを見てきょうみをもったのがきっかけでした。

この本のあらすじは、高校生の「僕」が病院で「共病文庫」という本を拾う。それは、クラスメイトの山内桜良の物で、その本には膵臓の病気で余命があまりないと書いていて、「僕」は山内桜良の病気の事を知ってしまうという話です。私は、この本を読んで教わった事が二つあります。一つ目は、「人と触れ合う事の大切さ」もう一つは、「生きる」という事の大切さです。そして、その事を気づかせてくれた文や場面があります。

一つ目は、「私の魅力は、私の周りにいる誰かがいないと成立しない。」という言葉と、二つ目は、僕が桜良に、「君にとって、生きるっていうのは、どういうこと?」と質問した時に桜良が言った「きっと誰かと心を通わせること。そのものを指して、生きるって呼ぶんだよ。」という言葉です。

私は、前から自分の長所が思いつかなかったり、自分の魅力とかも分からなく、自分に自信がありませんでした。そんな時、一つ目の言葉が私に教えてくれました。今、私は長所が簡単な物だけど言えるようになりました。それを気づかせてくれたのは、周りの友達でした。友達のおかげで長所が分かったし、その長所は友達がいなきゃ成立しない。友達やたくさんの人と触れ合う事で自分の魅力に気づくんだと感じました。この言葉が、私に人と触れ合うことの大切さを教えてくれました。

そして、二つ目の言葉は私に「生きる」ということの大切さを教えてくれました。私は、ネガティブになる事が多く、死ぬのが怖いと思っていました。でも桜良は、常に前向きに楽しく生きていて、私はすごく感動しました。自分が病気にかかったら、いつ死ぬか分からないなら、もう死にたいとなると思います。でも桜良の楽しく生きている姿や、話している言葉、文章に私は、「生きる」ということの大切さを学びました。

私は、この本を読んでたくさんの事を学びました。人と触れ合う事で、自分の長所や魅力を見つける事ができるという事。死という事を恐れず

に楽しく過ごせば死は怖くなくなるという事。この本は、ネガティブ思考だった私の考えを、変えて、生きる事の大切さと、人と触れ合う事の大切さと楽しさを教えてくれました。この本が、私に教えてくれたように、私も悩んでいる人がいたら、助けてあげたいです。そして、自分がまた悩んだ時も、この本が教えてくれた事を思い出し、忘れずに、毎日を過ごしていきたいです。

【講評】

「あたりまえ」の大切さに気付いた時、生きることが尊く感じられるようになります。生きることの大切さや、友達の存在の価値をあなたに教えてくれた「本を読む」というあたりまえの日常も、きっとあなたの人生を豊かにしてくれる材料のひとつになるはずです。「あたりまえ」を、大切に積み重ねていってください。

★ 佳作

「世界で一番貧しい大統領からきみへ」を読んで

鴛泊中学校　一年　杉本　天河

二〇一〇年から二〇一四年までの間、ウルグアイの大統領を務めた、ホセ・ムヒカ氏は、「世界で一番貧しい大統領」として給料のほとんどを寄付している質素な生活が話題になりました。ノーベル平和賞にもノミネートされ、日本のテレビにも時々登場していました。

まず、「貧しい」とはなんなのでしょうか。お金を持っていないから貧しいのでしょうか。食べ物をしっかり食べていないから貧しいのでしょうか。僕はそう思います。でもホセ・ムヒカ氏はそうは言いません。『本当に貧しい人は、世界とつながっていない人だ』と言うのです。第一ホセ・ムヒカ氏は、自分のことを貧しいと思っていません。いまある物に満足しているからです。それは、たくさん物があっても幸せにはなれないと考えているからです。

僕は、物はお金で買えると思っていました。ですが、本当は、そのお金を得るために費やした時間で買っているんだと気づきました。そして、物の価値というのは、それを作った人が努力した時間なのではないのでしょうか。これを知らない人を貧しいと言うのではないのでしょうか。

ホセ・ムヒカ氏が伝えようとしていることに、「人生という時間を大切にする」があります。僕も人生という長い時間を使っている真っ最中です。時間はいくらあってもたりない気がします。楽しい時間は早く感じ、悲しくつらい時間は遅く感じます。でも過ぎてしまった時間はもうもとには戻らないのです。つまり、過去より未来が大切なのだと僕は思うのです。

ホセ・ムヒカ氏は何度も投獄されましたが、あきらめずに、人間とは何かを問い続け、いかにわずかなもので、幸せになれるかを学びました。

だからこそ、「人は何度も挫折を経験する必要がある」そこから何度もはい上がることが大切だと言っています。

「戦う前から諦めている連中を見ているとイライラする。」という言葉は、勝つ信念を持ってほしいからだと思います。

僕もよく、「あー、これ負けたわ」と試合前に言ったり、テストで文章題を見るだけでパスすることがあります。

そんな時には、ホセ・ムヒカ氏の言うように、勝つと信じて前に進む、チャレンジ精神が大事だと思いました。

【講評】
自分にとっての幸せとは何かということを、改めて考えさせられる感想文でした。物質的に豊かになるためには金銭的に豊かになる必要がありますが、そのためにはたくさんの時間を労働に費やす必要があります。労働の結果、金銭的な豊かさを手に入れた反面、精神的にはちっとも豊かではない…とならないように、自分の未来をデザインしていけたらいいですね。

★ 奨励賞

「君の膵臓をたべたい」

鬼脇中学校　二年　七戸　岳

僕がこの本を選んだ理由は、初めてこの本の題名を見たとき「君の膵臓をたべたい」という言葉から本の内容が想像できず、興味がわいたからです。

この本は他人に興味がなく、関わろうとしてこなかった主人公の「ぼく」と、人との関わりを大切にする山内桜良という膵臓の病気をもった女の子の話です。二人は、「共病文庫」をきっかけに出会い、「ぼく」は桜良から人の「生」や「死」、そして人間との関わることの楽しさを学んでいきます。

この本の中のセリフに「誰かを認める、誰かと一緒にいて楽しい、誰かと一緒にいたら楽しい、誰かと手を繋ぐ、誰かとハグをする、誰かとすれちがう、それが生きる。」という印象的な言葉があります。なぜなら、僕はこの言葉に出会い、改めて生きることの意味を実感できたからです。

今まで僕は、大きな病気に一切かかったことがありません。そんなこともあり、命の大切さを簡単に考えていたように思います。ですが、人間には命が何個もついているわけではありません。ゲームのように何回死んでもやり直せるわけではありません。死んでしまったらそこでゲームオーバーなのです。桜良の命が失われた悲しみに触れ、僕はそんな当たり前な命の大切さを気付いたのです。

また主人公の「ぼく」は、とても人見知りなのですが、そんなところは自分とよく似ていると思います。なので僕は「ぼく」の気持ちがよく分かりました。ですが最後には「ぼく」は桜良の死を乗りこえ、それを克服していきました。僕も、そんな「ぼく」のように、人見知りをこの本をきっかけに直していきたいです。

皆さんはきっとこの本を読んだら、命の大切さや尊さ、生きることの意味が分かるはずです。そして自分はこれからも命を大切にし、積極的に人と関わりながら前向きに生きていきたいです。

【講評】
身近な人の死に触れたことで、改めて「生きる」ことの意味や尊さに気づいた主人公、そして、その物語を読んで実感できた七戸くん。「人間には命が何個もついているわけではない」「ゲームのように何回死んでもやり直せるわけではない」というところから、その思いが強く伝わってきました。

普段の生活の中で「命の大切さ」を実感することは、そう多くないでしょう。ですが、「生きる」ことの尊さは、決して忘れてはいけないことです。この本を読んで改めて気づいた気持ちを、ぜひ今後の生活の中で大切にしていってくださいね。

★　奨励賞

『ビリギャル』を読んで

鬼脇中学校　一年　熊谷　宙大

みなさんはこの言葉を聞いたことがありますか。「ダメな人間なんていないんです。ただ、ダメな指導者がいるだけなんです。」これは、『ビリギャル』という本に出てくる言葉です。

『ビリギャル』とは、一年で偏差値を四十上げて慶應大学に現役合格した実話が書かれた本です。

僕は「ダメな人間なんていない」という言葉には共感しましたが、「ダメな指導者がいるだけ」というのは違うように感じられました。指導者が良いから勉強が分かるんだと思っていたからです。ですが、この本では指導者が知識をただ教えるのではなく、生徒と一緒に知識を求め、先輩としてアドバイスをするというのが生徒と指導者の適切な関係性だと書いています。つまり、その関係が「良い指導者」につながるのだと僕は思います。

僕は『ビリギャル』という本を読んで、二つのことを大切にしていきたいと思いました。

一つ目はこのビリギャルの周りの人誰もが思ったような目標でも、あきらめず努力することです。二つ目はいつか仕事などで先輩になった時に、知識をただ教えるのではなく、知識を求めることです。なぜこの二つを大切にしたいかというと、大人になって仕事をしていて、努力も何もしないでいると、先輩として後輩に良いアドバイスができないからです。そんな人は、社会で通用しないと思います。この二つを大切にするために、何ごとにも「無理」などとはいわないでチャレンジをし、友達同士で教え合う時に一方的に教えるのではなく、優しくアドバイスしたり、相手からも知識を求めるようにしていきたいです。僕は『ビリギャル』から努力することや、知識をただ教えるのではなく、優しくアドバイスすることや、知識を求めることの大切さを学びました。そこで学んだことから、何にでも努力し、知識を教えたり、求めることができる人になりたいです。そのために、やりとげることができないことでも「無理」といわずに出来るまで努力します。

【講評】

「ゼッタイ無理」と人から言われるような目標でも、あきらめずに努力すること。難しいことですが、ぜひ、中学生の皆さんに意識してもらいたいことです。自分が「ゼッタイ無理」と思ってしまっては、自分の可能性を広げるチャンスを逃してしまいます。この本を読み、「何事にも無理などと言わないでチャレンジしていきたい」と感じた今の思いを失わず、今後の学校生活でも、たくさんのことに挑戦してください。

★　奨励賞

「戦争がなかったら」を読んで

鴛泊中学校　一年　髙橋　優羽

八月上旬、何げなくつけたテレビでは、戦争の映像が映し出されていた。ふとその時、この本を思い出した。と同時に映像に映った人々の苦しみが心に突き刺さった。この内戦でどれほどの人々が傷つき、犠牲に

なったことだろう。私には、はっきりとは分からない。本やテレビで見たことぐらいしかない私は、戦争について恥を知った。だから、この本を通して深く知っていきたかった。

この本は、二〇〇三年にリベリア共和国で起こった内戦の実話である。この内戦を通し作者が出会った三人の子供達の十年間が描かれている。その三人は、モモ、ムス、ファヤという。モモは十三歳で授業中にゆうかいされ、機関銃をもち、ムスは二歳で右手を失くし、ファヤは、早殺しと呼ばれ。という戦争によっての悲劇だった。一番心を打たれたのは、ムスという女の子だった。ムスが二歳の時にこの内戦が起きてしまった。その時に右手を失った。内戦が終わり、ムスはいつのまにか、アメリカで治したいと思うようになった。ようやく夢が叶う日が来た。ムスのために色々な人が寄付や募金をするようになり、義手を装着できるようになった。だが、義手を装着するのを躊躇した。私が思うには、ムスは、自分の右手が完全に元通りになっていく、と思ったと思う。私は読んでる途中に、うすうす気づいていった。それでもムスは、他の子よりも強く、たくましく十年を過ごしていった。私は少し、ムスの強さに感動した。なんだか尊敬した気持ちになったのだ。

私は戦争がおこなわれていた時代では、生きていれなかったと思う。それをのり越えて生きていたムス達はたくましい人達なんだと心の奥底で感じた。また少し感動してしまった。だが、戦争が終わって環境が変わり、生活に不自由を感じている人や、家族と離ればなれになり、悲しい思いをしている人だって、少なくないと私は思う。作者が出会った三人もそうだった。戦争によって苦しんだり、ケガをした人も沢山いる。私達は、その人達をどうやったら助けられるのだろう。きっと簡単に助けることは難しい。でも、戦争の苦しみを分かることはできるだろう。私は昨年、戦争が行われていた時代で必死に生きた地域のおじいちゃんの話をきいた。その頃の環境や生活を詳しく教えていただいた。社会の授業などで戦争について習ってたのでなんとなく分かった。最初に感じたのはやっぱり戦争は人々を苦しめるものなんだと思った。

この本を読んで、戦争で生きてゆく中、人々は苦しみにもたえ、必死で生きてゆく姿を生写真で見たり、言葉で感じる事ができた。私は戦争物の本を読むのが好きで、自分は体験した事がないから、苦しんだ人達の気持ちになりたいと思った。だから、この本に出会えてうれしいです。ぜひ読んで見て下さい。

【講評】

戦争がもつ悲劇的な側面は、誰もが知っていることのように思います。だからこそ、それを他者に向けて伝える時には、自分なりの切り口、独自性が求められます。読書で知ったことと、自分の体験を結びつけながら、自分なりの思いを紡ごうとしていることが、良く伝わってくる文章でした。

『審査を終えて』

第三十一回読書感想文コンクール審査委員長

鷲泊小学校　高桑　政人

私は子どもの頃、読書感想文を書くことが苦手というか、嫌いでした。せっかく原稿用紙いっぱいに文字を書いたのに、「字がきたなくて読めない」「改行が間違っている」「感想はどこに書いてあるのですか」と先生に指摘され、何度も直しているうちに、書くことが嫌になってくるからでした。恐らく、現在の子どもたちも同じような理由から、文を書くことを苦手としている子どももいるかと思います。

今回、読書感想文の審査委員として、子どもたちの書いた文を読んでいて、一番感じたことは「この本を読んで自分が変わったことを誰かに伝えたい」という強い気持ちでした。感想文を書くにあたり、子どもたちはその本を何度も読み返したのでしょう。その深い読書を通じて登場人物との心の交流を行い、そこで今までの自分をふり返り、見つめ直すことで、新たな自分に出会うことができたのだと思います。その変容を誰かに伝えたいという心をたくさんの作品から感じられました。

昨今、子どもたちの身の回りにはテレビやゲームだけでなく、SNSや動画サイトなど、大人が理解するよりも速いスピードで、様々なメディアが溢れています。そこでやりとりされているものの多くは、刹那的な面白さや、表面上の言葉のやりとりが多く、深く自分や相手と向き合えるものはそう多くありません。そんな時代だからこそ、『読書』という静かに本の世界に没頭し、豊かな疑似体験を経験できることが、子どもたちの心を成長させられる大きな力になるのではないかと思います。

子どもたちにはこのコンクールの結果に一喜一憂することなく、たくさんの本に触れてほしいと思います。そして、読書の楽しさ、自分を見つめ直し、新しい自分に生まれ変わる歓びを感じてもらえると何よりです。そんな想いを感じられたら、読書感想文を書くことへの抵抗がなくなっていくのではないかと思います。来年もたくさんの読書感想文に出会えることを楽しみにしています。

【第三十一回　読書感想文応募校と応募数】

■小学校一学年の部
鴛小　三点
利小　二点

■小学校二学年の部
鴛小　十点
利小　三点

■小学校三学年の部
鴛小　十五点
利小　五点

■小学校四学年の部
鴛小　十八点
利小　四点

■小学校五学年の部
鴛小　二十二点
利小　六点

■小学校六学年の部
鴛小　十五点
利小　六点

■中学校の部
鴛中　五十六点
鬼中　十一点

小学校計…　百九点
中学校計…　六十七点
合　計…　百七十六点

【審査の先生】

鴛泊小学校・・・・・・・・高桑政人先生
利尻小学校・・・・・・・・斎藤亜伊先生
鴛泊中学校・・・・・・・・小林裕子先生
鬼脇中学校・・・・・・・・野呂田大輔先生

● 平成二十九年度
第三十一回読書感想文コンクールを終えて

読書感想文コンクールに、応募していただいた小中の児童・生徒の皆さん、ご協力ありがとうございました。

また、各学校の校長先生はじめ諸先生方には、作品の取りまとめ、審査等、お忙しい中ご協力をいただきまして、厚くお礼申し上げます。

この作品集は職員による手作りですので、読みにくい点もあると思いますが、どうぞご了承ください。

今後とも何かとご指導、ご協力の程、よろしくお願い申しあげます。

平成二十九年十二月発行
利尻富士町教育委員会鬼脇公民館

本に恋する季節です！

2017 第71回
読書週間標語